
セカンドトランス

海崎 詩響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンドトランス

【Nコード】

N0524X

【作者名】

海崎 詩響

【あらすじ】

目が覚めるといきなり死んでいた篠崎 諒が気まぐれな門番「薫」に出会い転生するが、余計な能力をつけて転生させる。その能力に振り回される、恋あり？エロあり？バトルあり？のドタバタ物語。

第1話

プロローグ

俺の名は篠崎諒、中学3年生だ、目覚まし時計のアラームがなって、目を覚ます。

「ここはどこだ？」俺は目を覚ます、見渡しても真っ暗だった。諒「こういう時は現実逃避だ、寝る！」

寝ようとして目を閉じていると女の子の声が聞こえた。

？「おい、起きろ。」

誰か何か言ってるな、まあ無視だ。

？「おい、起きろ！！」知らねえな、知らねえよ。

？「何か暑いなあ、服脱ごうかなあ。」

な、何だって！？

こりゃ、起きるしか…。目を開けると満面の笑みの美しい女性がいきました。何故か似合わないハンマーを持って。

？「このエロガッパ！」諒「ぐはあ！！！」

いきなり10メートルぐらいぶっ飛ばされました。いきなり何なんでしょう！？

？「全くすぐに起きないからだ」彼女は仁王立ちで言う。

完全に目を覚ました（覚ますしかない）俺は、彼女から正座で説教をうけていた。

諒「あの…、」

？「何だ、エロ魔神」

おいおい、会って僅か数十分でカップから魔神へ昇格しちゃったよ。諒「ここはいつたいてどこで貴方はいつたいて誰ですか？」

？」「ここは三途の川の間点だ。それで私はこの門番の薫だ」

第2話

諒「はあ、つまり俺は死んだと…、お休み。（薫って名前マジかよ似合わねえー（笑））」

薫「ほおー、貴様はまた殴りたいんだな（笑）あと、名前を馬鹿にするな」

バキッ！！

諒「もう殴ってるじゃん！！つか何で心の声読んでの？」

薫「うるさい！！お前の状況分かってるのか！？」

諒「まあ、アレだよな、俺は死んでるんだよな、確かこうなったのも家に強盗が入って、犯人がナイフを振り回してナイフを姉貴に向けたから無我夢中になってたら姉貴をかばって俺が刺されて死んだんだよな」

薫「分かってたなら、何故ボケた！？」

諒「まさか厨二的展開になるとは思えず（笑）」

薫「お前、アホなのか賢いのか分からん…。まあ、改めてだがお前はお姉さんをかばって死んだ。本来なら天国に行くんだが…。」

諒「行くんだが、どうしたんだ？」

薫「現世にもう一度生まれかわれ。」

はい？今なんつった？

薫「聞こえなかったか、もう一度生まれかわれ」諒「理由が分からない！つかどうやって！？」薫「理由は気まぐれ、生まれかわるには川を泳いで下ればいい」

うわあ、まさかの気まぐれ…、いいのか門番…。

薫「時間がない！！早く行けっ！！」
ドンっ

えっ…、まさか…。

諒「マジかよー！？薫も一度来たらお前を殺す！！」
こうして諒は流されていった。

第2話（後書き）

簡単にですが、プロフィールです

篠崎 諒

身長172cm

体重60kg

A型

年齢15歳

外見

髪色は黒

髪型は武装錬金の武藤カズキ

目の色は黒

顔は上の下

性格

明るく誰とでも馴染める性格。どんなポケもツッコムツッコミ担当。時には空気を読まないポケや天然ポケを発動する。おせっかい。

追加性格

エロ魔神：一定のエロレーダーを越えるとエロ魔神化する。

薫

身長163cm

体重44kg

B型

スリーサイズ

86/50/83

髪色は青

髪型はリトルバスターズの西園美魚

??歳

性格気まぐれ。とにかく気まぐれ。気に入らなかつたら、殴る。（ただし門番の時のみ）

通常時誰にでも優しく接する。時々諒に対し冷たい言葉を言っが陰ながら諒を心配している。通称ツンデレ。可愛いものの好き。心を許したものは極端にデレる。

第3話（前書き）

最近暇でくだらないネタが思い付きます（笑）文章に自信がありませんが出来る限り毎日更新していきたいと思ってるのでよろしくお願いします。

第3話

？「おはよう朝ですよ。」

（あ、俺転生したんだな。あいつめ、今度あつたらぶつ飛ばす…。）

？「ねえ姉さん。起きてくださいよぉ…。」

（誰か呼んでるけど関係ないな、だって俺は男の子だし（笑））

？「起きてよ」

バジっ！！

諒「痛っ！何だこれデジャブ!？」

？「やっと起きたよ、おはよう姉さん」

諒「いやいや、待て俺は君の姉さんじゃないから。つかそれ以前に俺は男だ!!」

明「また、寝ぼけちゃって、あなたは終
諒^{ひいらぎじょうか}華で、私^{ひいらぎあかり}は終
明
であなたの唯一の妹じゃないですか!」

イマナンティッタ？

諒「ゴメン、モウイチドイッテクレ」

明「だからあなたは私の姉であなたの名を諒華、私が明です！！」

諒「はいっー！？」

（まさか肉体が思いつきり変わるなんて…。まあそれよりも、改めて確認したいな）

諒「あの、明さんとりあえずいくつか頼みがあるんだけど、まず鏡を持ってきて、それでここの住所と俺の歳を教えて」

明「何かよそよしいし変な姉さん、ちょっと待ってて」

そついうと明は部屋を出ていった。

諒「状況を確認しよう、俺は死んで、三途の川の門番に会って、薫の気まぐれで転生した。転生したのはいいが俺は何故か女になっていた」

（OK、OK、ここまで厨二的展開で大丈夫だ。だが、何故女！？）

薫「それはね、私の気まぐれ（爆）」

諒「いきなり出てくんない！ビビったじゃねえか！！！」

明「何！？どうしたの！？一体何が……、あんただれ？」

第4話（前書き）

少しだけ長めです。

だけど駄文です。

早くうまくなりたいなあ（T
|
T）

第4話

テーブルにはいきなり現れた薫、明、そして諒がいる。明が諒の隣に、そして薫がいる。無言のまま30分経過していた。

諒「（辛い！この空気辛すぎる）」

薫「私の名前は薫と言います、君のお姉さんの諒華さんに話があった来ました。ちなみに私とお姉さんの関係は友達です」

諒「待て！誰がお前のとも…（黙れ工口魔神）…、すみません、何でもないです。」

明「なあんだ、お友達だったんですかあゝ、ご迷惑おかけしました（笑）」

薫「こちらこそすみませんでした。あの少しだけ諒華さんとお話したいので外してもらってもいいですか？」

明「分かりましたゝ、ごゆっくりゝ」

諒「お前いったい何なんだよ！」

薫「いいツツコミ！んでまあ、時間がなかったから状況説明出来なかった、ごめんなさい…。」

諒「わかった、もういいからこの状況を教えてくれ。」

薫「君には本当に悪い事をした、こうするしかなかったんだ…。ごめんなさい…。」

諒「どうしたんだよいったい！？」

薫「君には1から話さないといけない、長くなるが聞いてほしい」
薫の話聞くには、本来俺は死ななくてもよかった。だが神様のミスで殺す人間を間違えて俺は軽いケガですむのが死につながってしまいました。

三途の川で薫に会ったさい、神様がそのミスをごまかしてそのまま天国に連れていかそうとしたから、その神様を許せなかった薫が俺を再び生かす為に川に落としたらしい。

薫「それで君が女の体の理由だけど、それは体が変わったら面白いから！」

諒「お前シバくぞ！」

薫「まあまあ。それで今の状況だけど君の性格はお嬢様系だと偉そうじゃない感じ。つまり優しい感じ。君は5人家族で3人姉妹の次女になつて。だけど、君は本当の家族ではなく、両親姉妹共に義理。よかったな！」

よくねえよ！

薫「んで今は3月で君は15歳で中3で今年高1になり私立の女子校に通う設定だ」

何だと！？女子高校生になるだ！？んじゃあんなことやこんなこと…（バキッ！）はい、殴られました。

薫「それで姉の名前は瑞希16歳4月で高2、んで妹が明14歳で4月中3だ。」

まあ何となく状況がわかった。

薫「それで君は気づいてなかったと思うが自分の胸を見る。」

胸？おお！かなりデカ…、（バキッドスッ）また殴られました。

薫「違う！ネックレスだ！」

言われてみて見ると十字架のネックレスをつけていた。

薫「それを外してみて。」

そう言われて外すと本来の男の状態に戻った。

諒「よっしゃ〜！元に戻った！」

薫「話を最後まで聞いて。君がネックレスをつけている理由についてなんだが、最初に私の気まぐれで体を変えたって言ったがアレは9割嘘だ。君の、諒としての体はもう死んでいた。なのに男のまま生き返したら体が死んでいるから生き返してもすぐに死んでしまう。だからそれを防ぐ為に、そのネックレスをつけると女になる魔法をかけたんだ。そうしたら君は女としては死んでない状態だからな。ちなみに外しても生活出来るがよく持って1日だ。1日過ぎると体が朽ちるから気をつけて。あと、もう1つネックレスを絶対に水に濡らすな。」

諒「何で？」

薫「水に濡らすと魔法が一時的になくなり男に戻ってしまうからだ」
ら〇ま1/2かよ！

薫「ちなみにその魔法、消えたら12時間は元には戻らないからな」
諒「めんどくさいが、まあわかった。」

薫「悪い、忘れてた。水に濡らすなより大事な事だ。諒を知ってる人に諒華が諒って事を言うな。死者が生き返るのは本来タブーでバシたら、私とお前は死ななければならぬ。私が死ぬのは構わないが諒を2度も死ぬのは嫌だからさ。だから私は言わないし君も絶対言わない事。いい？」

諒「わかった、絶対に言わない。俺が死ぬのは構わないが薫が死ぬのは嫌だからな。」

薫「な、何言ってるんだよ、意味分らないし！お前は心配しないでいいから！っていうかそういう事言われても嬉しいわけないんだからね！」うわあむっちゃ早口（笑）

薫「まあとにかく以上の事は守ってね。それで君にはチート能力をつけました。何か質問は？」

諒「とりあえず大丈夫。あとは自由に気ままに過ごすよ。んで薫、チートつけるな！」

薫「いいツツコミだねえー！！まあチートって言っても成績がトツプランク、運動神経抜群、おまけにスタイル完璧なだけだから（笑）」

諒「そのチートならよし！大歓迎！」

薫「いいのかよ！ああ…、私がツツコンだ…。」諒「まあそれは置いて薫に言いたい事がある。生き返らせてくれてありがとう。」

薫「なんでお礼を言うんだ？君は私を恨んでもいいはずなのに。」

諒「君にうらんでも仕方がないし、あとどういう結果であれ生き返らせてくれたんだ。俺の為にやってくれたんだ、本当に嬉しかっただからお礼を言いたかった。ありがとう。」

すると薫は泣きはじめた。

薫「どうして君は優しいのかなあ…。巻きこんでしまったのに…。」

諒「もう気にしてないから、大丈夫。ありがとうな。」

アレ、薫震えてる、大丈夫かなあ。

薫「ありがとう！」

いきなり抱きついて来た。うお！胸が顔に！胸が顔に！嬉しいけど
苦しい！

薫「あ、馬鹿っ」（照）！！」

またぶっ飛ばされたよ、どれだけぶっ飛ばされたいのかなあ

（T―T）

第4話（後書き）

今回は説明が長めです。うまくまとめられるようにがんばります。
あと駄文をみてくださった人の中でアドバイスがあつたらお願いします。

学園編は次かその次までには載せるつもりです。

第5話（前書き）

題名を変えました。

くだらない妄想ネタはよく思いつかびます。
温かい目で見てください。

第5話

薫「…ごめんなさい。」

諒「もういいよ、君に殴り癖があるのが分かったから。」

薫「本当にごめんなさい…。そう言えば、まだ学校について説明し
てなかったから、説明するけど、学校名は私立水代女子高等学校と
言つて、君の今のお姉さんも通っている所であそこは寮生活となつ
ていて入学してすぐのテストの結果で寮の部屋が決まるから。ちな
みに、3位までになると専用の個人部屋になるから。それ以外は誰
かと一緒の部屋だから君は3位以内に入らないと秘密バレやすくな
るから何が何でも頑張れ！」

諒「何っ！？んじやいきなり頑張らないと死亡フラグ立つ訳！？」

薫「悪いけど、そうなつちやうから。だけど今の君なら大丈夫だか
ら！そろそろ時間だから戻らないといけないからさ、何かあったら
また教えて。ごめんけどそれじゃ！」 諒「あ、おい！行つちやつ
たよ…。まあとりあえずテスト頑張らないとまずいな…。」
いきなり悩まされる諒であった。

***** 4月入学式

諒「ここが今日から通う学校かぁ、ここで諒華として生きるのかぁ

」

（そう言えば友達今0じゃん、やっていけるのかなあ……。）
？「おはよう！」

諒「あ、うんおはよう」？「あなたの名前は！？」

諒「（いきなり何なんだ！？）え〜と終 諒華です。」

春「いい名前だねっ！私は春野千春^{はるのちゅん}あだ名はあなたに任すね！」

諒「う、うん……。 （何か 偉く積極的だな）

春「私中学の時の皆と違う学校に来たからまだ友達いないんだ、だから友達になつてね！」

諒「う、うん……。 （もう友達出来ちゃったよ）

春「さつきクラス表見に行った際に同じクラスだつて知つて諒華を見つけたから声かけたんだよ〜！」

諒「何で私が諒華だつて分かったの！？」

春「だつて『諒華として生きるのかあ〜』つて言つてたからさ（笑）でも、何か変な感じ、新しい名前をもらった感じのセリフだね。」

（ギクツ！妙に鋭い！コレはマズイ……）

春「まあいいや！クラスだけど1組だよ」

諒「（いいのかよ！）そうなんだあ〜ありがと〜、ん〜と春野千春だから……。んー、ちーちゃんつて呼ぶね。」

ち「分かった！んじゃよろしくね、諒華！」諒「んじゃ入学式始まるから向かうか！」

ち「了解！」

諒「やっと終わった〜。〜。」

ち「長かったね〜。〜。でも、次が大変だよ、テストが5教科もあるからね〜。〜。」

諒「そうだった！まあやるしかないよね」

ち「そうだよね〜、んじゃテスト頑張りますか！最初は国語だった。〜諒「わかった（本当に勉強チートついてるのかなあ〜）」

〜教室〜

先生「ではテストを始めてください。」

諒（うわあ、難っ！こんなの無理！解ける訳…アレ、意識が…。）

〜テスト全科目終了〜

先生「ではテストは以上で終わりです。寮分けは明日発表されます。明後日からその寮に全員住んでもらいます。なので、荷物を明後日持ってきてください。ちなみに学年上位3名は専用の個人部屋になります。それ以外の寮は全クラスが対象となっています。別のクラスの人とも一緒になるかもしれませんが、仲良くするように。あとテストで著しく点数が低い人は補習もあるので忘れないように。では、気をつけて帰るように。」

諒「コレはまずい…。やっちまったパターンだ…。orz」

ち「諒華テストどうだった…って、どうしたの！？orzみたいな恰好しちやって！？」

諒「意識なくしてテスト書いた記憶がない…。」

ち「あ…。その、ドンマイ…。赤点回避してるかもしれないし、まあ明日だよ！」

諒「うん…。んじゃ帰るね…私。」

ち「んじゃバイバイ。」

〜家〜

明「姉さん、テストどうでした！？」

諒「聞くなmy sister。」明「まあ補習なつたとしても、姉さんならやりきれますよ！」

諒「そうかもね…。部屋戻るから。あとご飯いらないから、もう寝る。」

明「ね、姉さん!？」

諒「お休み…。」

バタンッ

明（姉さん、テスト出来なかったのがやっぱりキてるんだなあ…。

よし、明日は姉さんの好きな物をつくってあげよう！）

～諒華の部屋～

薫「お帰り～！テストどうだった!？ってどうした!？」

諒「あ、薫来てたのか…。意識なくして書いた記憶がない。」

薫「いきなり現れたのにツツコミなしとは重傷だな…。まあ大丈夫だつて！明日を楽しみにした方がいいって！」

諒「ソーデスネ。タノシミニシテマスヨ、ンジャオヤスミ。」

薫「寝るな！」

知らねえ～な知らねえよ。現実逃避するし

第5話（後書き）

こんな駄文を読んでくれる人がいるのか少しだけ不安になってきました。それでも、書き続けます！

プロフィール第2段をやりたいと思います。

柊 諒華（篠崎諒女時）

身長…諒と同じ

体重…47kg

髪の色…諒と同じ

髪型…ロング（時々ポニーテール）

スリーサイズ

88 / 55 / 86

性格…諒と同じ

柊 明

身長…153cm

体重…??kg

髪の色…金色

髪型…天神乱漫に出てくる千歳君の妹さんを想像してください（名前を度忘れしましたorz）

スリーサイズ

74 / 52 / 70

性格

姉思い。少しシスコン気味。お気楽で若干大雑把で細かい事を気にしない。

今回はここまでにします。春野千春のプロフィールを発表しようにも春野さんの感じがまだ想像できてないからまだ言えません。決まり次第載せます。あと、柊家の詳しい家庭内容ですが柊家は5人家

族ですが、家には諒と明の2人しかいません。両親は海外で仕事を
している為、滅多に帰れません。一番上の瑞希は寮に住んでる為、
いません。料理は諒もそこそこ作れますが明がかなりウマイ為、毎
日明が作ってます。明が早くご飯を作らないといけない為、明は帰
宅部です。諒は転生前は弓道部でした。瑞希の入ってる部はもう少
し先で発表します。

どうにかまだネタは思いくけど、いつネタがなくなるか不安です…。

第6話

諒「ふわあゝ、よく寝たあゝ…。」

薫「やっと起きたね」

諒「来てたんだ？」

薫「違う！ずっとこの部屋にいたっ！」

ナンデスト！？

諒「なら俺はお前がいるなか、寝てたのか…、ゴメン。」

薫「いいよ！気にしなくて！だって…（だって寝顔見れたし）」

諒「（何か顔赤いし、最後まで聞き取れなかったけど大丈夫だよな）」

「

薫「それより学校行かないのか？」

諒「そうだったな、んじゃ着替えるかな、んで薫は帰れ！」

薫「えゝ何でえゝ？」

諒「そりや着替えを見られたくないからだ！」

薫「私は気にしないから」

諒「俺は気にするから！お前も見られるの嫌だろ！？」

薫「諒なら別にいいけど」

諒「言い切った！？（俺はこいつにどんなフラグたてたんだ？若し

くは男として見られてない？）」

薫「じ、冗談だよ気にしないで！（照）って何へこんでるの？」

諒「男の事情だ、それより急がないとかなりマジでマズいから！」

薫「分かってるって、んじゃ学校で！」

諒「ハイハイ、サイナラ。ん、学校？まあいいや急がないと！」

***** 学校

ち「諒華」おはよう！」諒「おはよう、今日だね、結果…。」

ち「そっぴやあゝそっぴだね、まあ補習だけは回避したいね（笑）」

？「おはよう、諒。」

諒「おはようって、お前は！？」

薫「はいはいゝ！薫ちゃん華麗に参上！（ドカーン！！）」

諒「ちよつ、お前こつちにこい！」

薫「いやん！諒が引つ張るゝ！」

トイレ前

諒「何でお前が制服着て学校来てるんだよ！？あと後ろのセット準備するな！」

薫「ねえねえゝ、この服似合う？」

諒「（駄目だ、こいつ話聞いてねえ）ハイハイ、似合ってますよあゝ 棒読み」

薫「そ、そうか。よかった（照）」

諒「何故照れる？まあそれより何故ここにいる！？」

薫「それはあなたを監視する為よ、うっかり秘密を言わないようにね。ちなみに昨日からいたわよ。」

諒「マジで！？ってよく学校の生徒になれたなゝ…。」

薫「ああーそれは私の力を使って…『そんな事に使うなあ！』」薫「まあそういう事だから。あと私の本来の年齢1000歳以上だけど、ここではあなたと同じにしているから、肉体も。」諒「じゃな」とマズいだろうな、実際は1000歳以上で高1はないな。」

薫「そっぴやあゝ。あとまだ名字言ってなかったけど、神崎ね、神崎かんさきえといで。」

諒「了解。んじゃ教室戻ろうぜ。『ラジャー』」

***** 教室

ち「おかえり、まさか2人が友達だったとは知らなかったよお！」

薫「ごめんなさい、説明が遅れていました。諒華さんと家が近所だ」とつい最近知り、仲良くさせて頂いてます。」

ち「なるほどお、んじゃ友達の友達は友達だね！これからよろしくね！」

薫「はい、よろしくお願いします、千春さん！」 諒「何で丁寧語なんだ！」

薫「（第一印象は大事だからよ）」

ち「????まあ、そろそろ席についた方がいいかも、先生が来るし。」

諒・薫「了解」

関「みんなおはよう！今日から担任の関野 舞せきのまいです。よろしくねえ。まあ今日はLHRの後はテスト結果発表で終わりだから緊張しないでいいからね！んじゃLHR始めるから、まあ今日は自己紹介！出席番号1番から簡単にどうぞ！」

***** 関「終わったねえ。んじゃテスト結果発表されるからちゃんと放送聞いてね！ちなみに私は補習対象者しか結果を知りません！だから放送終了後に言うから！」

「ただ今より1学年のテスト結果発表を行います。名前を呼ばれたものは放送終了後に職員室へ来るように。まず、第3位 495点あ 秋月恋きつきれん。」

諒「秋月!？」

薫「いったいどうしたの？」

諒「あいつは俺が死ぬ前にいた学校のクラスメートなんだよ。まさかあいつがここに来てるとは...。」

「第2位498点神崎薫」

諒「何高い点取ってるの!？」

薫「こう見えて勉強出来るのよ！」

ち「神崎さん凄いよ！2位になるなんて！」

「では第1位500点終諒華。以上で放送を終わります。」

クラス「ええ〜！」

諒「ナンデスト〜ッ!？」

関「それじゃ、神崎さんと柊さんは職員室に行つてね！んじゃこれから補習対象者を発表するよ〜!!！」

クラス「いやっ〜!!」 ＊＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ 職員室

諒「まさか意識がなくなつてたのにテストが出来たとは…。」

薫「これが私が使ったチートだよ！」

諒「感謝するよ、ありがとう。」

薫「どういたしまして。職員室に着いたから、後は秋月さんを待とうか。」

諒「あ、ああ…。(まさかあいつと会うとは…。絶対バレないようにしないとな)」

秋「すみません、お待たせしました…。!?あなたは!？」

諒「(まさか俺の正体気づいたのか!?)」

秋「テストで500点を取った柊さんですか!？」 諒「(何だよ焦らせるなよ!) まあ、うん。」

秋「凄いです！憧れです！」

薫「コホン、そろそろ職員室入らないか？」

秋「すみません！それじゃ入りましょうか。」

＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ ＊＊＊＊＊＊ 教室

諒「コレがウルズ部屋の鍵と青い腕章があゝ。」 薫「私はヴェル

ザンディ部屋の鍵と赤い腕章で恋ちゃんがスクルド部屋の鍵と黄色い腕章だったよね。」

諒「かなり恥ずかしいんだが…。」

薫「だけど着けているといろいろと便利じゃん！」

腕章をつけてる物は食堂や売店などでも優先的にする事ができ、1年間授業料免除、持ち込める私物の緩和化などといろいろとある。

諒「だがなあ…。」

ち「いやあゝ、2人とも凄いや!!今度からテスト対策には頼るよ!」

薫「任せて!千春さんはテストどうだった?」

ち「ギリギリだけど回避出来たよ!!」

諒「よかったゝ!まあテストの話は止めて授業終わったし部屋を見に行かない!?!」

薫・ち「賛成!」

第6話（後書き）

プロフィール第3段

春野千春

身長160cm

体重??kg

年齢15歳

髪色茶色

髪型テイルズオブヴェスペリアのリタ

スリーサイズ

80/58/86

性格

ムードメーカー。ポジティブシンキング。家族想い

秋月恋

身長165cm

体重50kg

年齢16歳

髪色恋姫無双の呂布

髪型恋姫無双の呂布

スリーサイズ

88/52/84

腕に銀色のブレスレットをしている

性格

みんなの前では頼れるお姉さん。だが実は甘えん坊で若干のネガティブシンキング。男嫌い（諒は例外）ムツツリエ口娘。（男嫌い
とムツツリは誰にも言わず隠している）

どうにか6話まで書きましたが未だに寮まで書けてません。どうに

か頑張つて書いていきます。
文才を分けて頂きたいです（笑）

第7話（前書き）

このストーリーは今のところ、時間がゆっくりとなっているのでまだに入学してから2日目です。

第7話

「ウルズ寮」

諒「ここがウルズの部屋かあ！中々に広い！って言うか個人なのに部屋4つもあって、風呂もあって、最新型テレビや、洗濯機、キッチンとかもあって、もはや、1人暮らし出来るよ！」

ち「凄っ…。」

薫「いやあ、こりゃ、ビックリだよ…。」

諒「んじゃ次はヴェルザンディ寮だね。行ってみようか！残りの2つもすぐ近くだしね。」

「ヴェルザンディ寮」

諒「あんまり変わらないけど、部屋が3つあってウルズは部屋の感じの色が青や紺などの落ち着いた感じでここは部屋の感じの色が黄色や橙色だね。」

薫「んじゃ、スクール寮に行ってみよう！多分秋月さんに頼めば見せてもらえるよ！」諒「そうかもね…、ゴメン、私疲れたからもう帰るね、明日から寮になるから準備しないといけないからさ。」

ち「そうかあ、んじゃまた明日ね！」

薫「…。」

「スクール寮」

秋「あ、神崎さん！え」と、どうしたの！？あとあなたは？」

ち「私は春野千春って言います！薫や諒華の友達です！」

薫「ゴメンね秋月さん。ちよつと各個人寮の見学してたんだよ。んでスクール寮も確認しようと思ってね。」

秋「なるほどあ。いいですよ！そう言えば柊さんは？」

ち「諒華は今日は帰っちゃったんだよ、何でも明日の荷物の準備をしないといけないらしくて。」秋「そうですね…。残念です…。」

薫「次は諒も呼んでくるよ。」ち「そう言えば薫って諒華を諒って

呼んでますけど、何ですか!？」

薫「単純に諒が言いやすいから。」

ち「そんな単純理由!？」

秋「まあそういう理由もありですよ(笑)今度から諒さんって呼ばうかな。」

薫「いいと思うし喜ぶぞ。あ、そうだから私を薫って呼んでくれ。」

ち「んじゃ私も好きに呼んでいいよ、ちなみにちーちゃんか千春って言われてる。」

秋「分かりました!では、薫さんに千春さん、私の部屋を見せますね!」薫「へえ」部屋は2つで基本は変わらず、あと部屋の感じは赤色やピンク色って感じだね。」

秋「はい!結構気に入ってるんですよー!他の寮はどんな感じなんですか!？」

ち「基本は変わらず、ヴェルザンディは3部屋でウルズは4部屋で後はそれぞれ部屋の色が違うくらいかな。」

秋「そうなんですかあ。今度見せてくださいね!」

薫「いいですよ。」

ち「にしてもいいなあーこない個人寮なんて!!私はワンルームでその部屋に他の人がいる感じだけど、まあそっちの寮見ると悲しくなるよ」秋「まあまあ、遊びにいきますから!そう言えば私の事今度から恋って呼んでください!」

薫「わかった、これからよろしくね恋さん。」

ち「よろしくね恋ちゃん!」

恋「はい!」

***** ~ 諒 ~

俺は薫やちーちゃんと別れて帰っていた。

「まさか秋月がこの県にいたとはなあ...」俺が死ぬ前に中学にいた県と今の県は違う。なのに、秋月と出会っるのは本当に予想外だった。

「あいつ引越してたんだなあ…。それにしても、まだあいつ持ってたのかよ。」

中学の頃に誕生日だった秋月に渡した銀色でシンプルなブレスレット。まさか未だに持っていてしかもつけているとは思わなかった。

「だが、俺が生きている事は言えないな。今は諒華だから…。何だろ、この気持ち…。訳分からんな、よし家までダッシュで帰るか！多分今日のテスト結果に未だに驚いてるんだな！早く帰ろう！」

***** 恋

薫「ゴメンね秋月さん。ちよつと各個人寮の見学してたんだよ。んでスクルド寮も確認しようと思つてね。」

部屋の確認をしていると、神崎さんと友達さんが来ました。何でも見学したいらしくて来たらしいです。恋「そう言えば篠崎さんは？」
ち「諒華今日は帰っちゃったんだよ、何でも明日の荷物の準備をしないといけならしくて。」 秋「そうですね…。残念です…。」

薫「次は諒も呼んでくるよ。」

恋「（諒っ！？何で諒の名前を知ってるの！？）」

ち「そう言えば薫って諒華を諒って呼んでますけど、何ですか！？」

薫「単純に諒が言いやすいから。」

ち「そんな単純理由！？」

恋「（何だ、ただそれだけの理由か。）まあそういう理由もありですよ（笑）今度から諒さんって呼ぼうかな。」

薫「いいと思うし喜ぶぞ。あ、そうだから私を薫って呼んでくれ。」

ち「んじゃ私も好きに呼んでいいよ、ちなみにちーちゃんか千春って言われてる。」

秋「分かりました！では、薫さんに千春さん、私の部屋を見せますね！」 ***** 2人が見学を終えて帰った後は、諒華さんについて考えていました。

「諒って聞いた時は焦っちゃったよ、だって諒は死んじゃったんだよね…。ねえ…。何でいなくなっちゃったの。ブレスレットのお礼言えてなかったし、私はあなたに…。」

諒の事を考えていたらいつの間にか涙が出てました。諒に会いたい。諒にお礼を言いたい。そして私の気持ちを伝えたい、私は諒が好きって事を。「まだふつきれてないなあ、早く立ちなならないと。あ！そう言えば私もまだ明日の準備してない！早く帰らないと！」

***** 柊家

諒「ただいまあ」

明「お帰り、姉さん！テストは、どうだった？」

諒「それが、まさかのテスト全部満点だった。」 明「…。」

諒「おい、明！どうした！戻ってこい、明！」 15分後

明「それで、姉さんは満点取って学年1位になって青い腕章をもらったって事ですよね。」 諒「そういう事。」

明「姉さん凄いです！瑞希姉様と同じ1位ですね！！！」

諒「瑞希姉様？」

明「あれ、聞いてないですか？姉様は4月のテストで1位をとり、1年と2年では1位しか取ってないんですよ！！！」

諒「（チート能力がなくても天才はいるんだな…。）凄いね。」

明「姉さんも姉様みたいにがんばって！！！」

諒「努力はするよ…。」 明「とりあえず、ご飯にしましょう！今日は姉さんの好物ばかり作りましたよ！」

諒「わかった、早くご飯にしよう！！！」

風呂

諒「いやあ、明のご飯うまかったなあ！！！！にしても何か肩がこつてるなあ、もしかして女状態だと胸があるからその影響かなあ。」

明「…さん…、話…すよ…。」

諒「参ったなあまだ、女の体に慣れてないなあ…。」

明「姉さん、電話ですよ！！！！」

諒「ん、何か聞こえる。」

明「姉さん！！電話！！！！ドア開けますよ！？」諒「マズイ！バレる！急がないと！！！！」

ガチャ

明「姉さん！！電話！！！！って姉さん！！何素っ裸なんですか！！！！」

諒「（あぶねえ！！！！）いやあ、今から出ようと思って（笑）」

明「早く服着てください！！あと携帯置いときますから！！」

諒「ありがとね。」

明「いえいえ。じゃ、私は戻るから。」

諒「さうで、誰からって、誰だこの番号？まあかけてみるか。」

プルルルルル

諒「もしもし終です。」薫「薫です、やっぱり秋月さんの事気にしてた？」

諒「ああ。危うくバレそうになったからな。出来る限り関わらないようにしたいと思ってる。」

薫「それが…、秋月さんが寮を見せてくれたって。」

諒「何で断らないんだよ！？」

薫「だって恋さんのあの顔見たら何も言えな…、ゴメン、何でもない。まあいいじゃん。部屋ぐらい見せてあげても。友達になるぐらいなら大丈夫だし、私もフォローするからね！！」

諒「わかったよ…。用件はこれだけ？」

薫「あと、ちゃんとブラジャーをつけて女もののパンツはきなさいよ。」諒「お前、透視してるのか！？」

薫「適当に言ったのにまさか合ってるとは…。まあちゃんと女らしくしなさい。」

諒「わかった…、努力するよ…。」

薫「そういう事だからんじゃね。」

諒「薫って一体…。まあ早く服着て寝るか。」

今日はいろいろとあつて疲れたよ。早く寝よう。

第7話（後書き）

恋について詳しい事情を話すと中学時代から諒が好きでした。ただ
ど諒が死んでしまった事で一時期自暴自棄になってしまい、それを
見た両親が引っ越しをしようと言つことになり引っ越しして今の学
校にいます。

本文をちよいとまた変えました。まあ分かりにくいと思いますが暖
かい目で見てください。

第8話

（翌日）

？「おい、起きろ！」

諒「（誰だこんな朝早くに…。つかデジャウ？）」

薫「諒、何してるんだ！早く準備」

諒「薫！？待て！？今何時だと思ってるんだ！？ほらまだ朝の5時じゃないか！？」

諒は壁にかけてる時計を指差す。時計は5時になっていた。

薫「私の携帯を見て時間を確認してみて。」

諒は薫の携帯画面を確認し愕然とする

諒「8時15分！？何で！？まさか電池切れかよ…。」

薫「さつき確認したけどそうだった、ついでに言えば携帯も充電切れ。」

諒「不幸だ…。だから起きられなかったのか。そう言えば何か夢で明が起こしにきてくれた気がする…。あれはガチだったのかよ…。」

薫「そんな事より早く着替えて！！ご飯も持ってきたから！」

（7分後）

諒「準備完了！！だけでもう遅刻だ、どうしよう！！」

薫「チツチツチ！何の為に私がいると思ってるんだ、私の力でどうにかしよう！」

諒「マジで！？具体的にどうするんだ！？」

薫「こうする（ニコッ）」

薫は素早く諒の首に手刀を当て気絶させる。

***** 学校

諒「はっ！遅刻だよ！！」

関「柊さん、LHRとは言えども私の話が終わるまでは静かにしてほしいんだけどな…。」

クラス「ハハハ（笑）」

諒「すみません…（照）」関「さて明日はクラスの親睦を深める為に毎年恒例の遠足があります。『ハイ！』春野さん何ですか？」

ち「バナナはおやつに入りますか！？」

諒「（なんつーベタな質問！？）」

関「バナナはおやつです！」

諒「（普通に答えちゃたよ！）」

関「場所は桜川公園です、今は桜が満開で綺麗よ。ちなみに、お弁当は一応は支給するけど足りない人は作ってもいいから。材料は食堂の人に言えばつかわせてもらうから。それじゃ時間余ってるけどLHRは終わり。チャイムが鳴るまで雑談オツケーだから、んじや〜ね。」

関野先生は用件を言い終えると他に仕事があるのか出ていった。するとクラスの約半分の女子が諒華の周りに集まってきた。

女子1「ねえ柊さん明日のお弁当一緒に食べましょ！」

女子2「ああー！私が先に誘うはずだったのに！柊さん私と食べよう！」諒「（何！？いきなり囲まれて一緒にお弁当食べようと誘われてる！？俺に何があった！？）え〜と…、『あ…。』ん？」

諒華が声のした方向を向くと話しかけようとした薫がいた。

諒「ゴメン、ちよつと抜けさせてもらうね。」

諒華は席を立ち薫に近づく。

諒「薫どうしたの？」

薫「いやあ…、その…、何でもない。それより明日の遠足楽しみだね。」

諒「そうだな。あのさ、明日の遠足で一緒にみんなと一緒に弁当食べないか？」

薫「！？いいの…？」

諒「全然構わないよ。むしろ嬉しいし。」

薫「ありがとう（照）。そう言えば明日は傘がいるかもしれないから持っていた方がいいよ、途中雨降るかもだから。」

諒「マジか！分かった、サンキュー！んじゃ他のみんなに伝えてくるからまたな！」

諒は自分の席に戻りみんなに弁当の事や雨の事を伝えた。

***** 薫

先生が去りお弁当と一緒に食べようと誘おうとしたらクラスの約半分が諒に誘いをかけていた。

「（ただ誘ってるだけなのに何だろうこの気持ち…。何かモヤモヤする…。）」

モヤモヤしていたら私に気付いた諒がこっちに来た。

諒「薫どうしたの？」

薫「いやあ…、その…、何でもない。それより明日の遠足楽しみだね。」

諒「そうだな。あのさ、明日の遠足で一緒にみんなと一緒に弁当食べないか？」

薫「！？いいの…？（まさか諒から誘われるなんて！？）」

諒「全然構わないよ。むしろ嬉しいし。」

薫「（嬉しい！？何言ってるんだよ！？だけど何か嬉しいかも…。）ありがとう（照）。そう言えば明日は傘がいるかもしれないから持っていた方がいいよ、途中雨降るかもだから。」

諒「マジか！分かった、サンキュー！んじゃ他のみんなに伝えてくるからまたな！」

薫「あ…、行っちゃった…。」

明日は遠足かぁ～楽しみ～。弁当作ってみようかな～。

第8話（後書き）

更新が1ヶ月以上遅くなってしまいすみません。就職活動などに時間がかかりすぎました。

これから日数は何日空くか分かりませんがちゃんと更新し無事完成させたいと思います。

第9話（前書き）

ただ今9話ですけど未だに一週間も過ぎてません。とても小説内の時間はスローペースです。

第9話

〔桜川公園〕

学校からバスで約1時間した所に諒華達はいた。目の前には満開の桜がいたるところにあった。

諒「ここが桜川公園！綺麗っ！」

ち「凄いねえっ！テンションアガッてキタッ！」

薫「こんなの初めて見た…。ここの世界にはこんなに綺麗な物があるんだ…。」

関「みんなあー、今は10時だから5時間後にバスに集合ね、それまでは自由に散策していいからね。ちゃんとお弁当は持つてまわること！小学生じゃないんだから馬鹿な事をしないようにね。」

クラス「ハイ！」

関「よし！んじゃ解散！」

諒「じゃ、みんなあの大きな桜のそばで食べよう！」

薫「あのさ諒、もしよかったら私の作った弁当食べてもらえないかな？」 諒「本当！？食べる！」

ち「私も食べていいかな！？」

クラス「私も食べたい！」

薫「いいよ！」

***** 諒「いやあー、美味しかった！」

ち「ホント、ホント！いい奥様になれるよ！」

薫「ブッ！奥様！？」

諒「思った。いい奥さんになれると思う。」

薫「……………（照）」

ち「さーで、今約15人ぐらいいるから缶けりしよう！」

諒「いきなりすぎるよ！」

ち「いいじゃん、いいじゃん！缶けりやる人手エあげて！」

諒「皆挙げてるし！分かった、私も参加するよ。」

ち「よし！んじやとりあえず、まず最初にみんなの電話番号を交換しよう！」

女子1「何で最初に電話交換？」

ち「その方が連絡取り合えて楽しいからだよ！本当はトランシーバーがいいんだけどないから代わりに電話で代用って訳！だから電話番号交換タ〜イム！」

〜10分後〜

ち「登録したね！それじゃ鬼は気分で私と諒華と薫と優奈ね！拒否権はありません！」

諒「拒否権なしだよ！」ち「最後にルールの確認だけど缶は4つあって鬼以外の皆はどこかに隠れて鬼に見つかったら缶を蹴りに走る。鬼は見つけたらその人の名前を言い缶を踏む。先に缶を踏まれたらその人はアウトでゲームオーバーだけど、缶を先に蹴れたらセーフ+アウトになった人全員を解放することが出来るから。これはオリジナルルールだけどみんなが自ら缶を蹴りにきていいから。缶を蹴り倒すことが出来たら鬼一体消滅出来てそして鬼から鍵を1つ譲ってもらえるから。ここまでで何か質問ある？」

女子1「その鍵って何？」

ち「ただ勝利条件が逃げ回るだけってのはつまらないから、ちょっとオリジナル加えたんだよ。鬼以外の勝利条件は鍵を4つ集めてそれを1つの状態に戻して宝箱を開けたら勝利って事だよ。」

そう言うところから箱と4つの鍵を出した。

諒「どっから準備した！？」ち「乙女のヒ・ミ・ツ！」

諒「まあ…いいや…」

ち「あと鍵を持つてる状態で捕まったら鍵を返してもらってから、そして缶と鬼を復活させてもらうから。ここまで質問は？」

クラス「ないよ！」

ち「んじや、200秒後に探しに行くから適当に散らばってね。私

「たちも缶の配置場所変えるからね。」

クラス「了解！」

こうして、1組缶けり大会が始まった。だが薫以外は知らない、諒華には勉強以外にも運動に関してチート能力を発揮していることを。

第9話（後書き）

文章短くてすみません。もう少し長い文章書けるよう頑張ります。
いい感想は頂きたいですけど批判などは止めてください。お願いします。

第10話缶けり大会（前編）（前書き）

今回は新キャラをたくさん出しました。そして、説明文より会話が
多いです。文章短くても読み疲れるかも知れませんがそれでもいい
と思ったら読んでください！

第10話缶けり大会（前編）

薫「それじゃあ、缶の配置だけどうしようか？」

ち「そうだねえ、この公園はけっこう広いし皆バラバラに置いた方がいいね。缶からは近すぎず、遠すぎずの距離で離れよう。場所には桜の近く薫は池の近く、優奈は遊具の近く、諒華は銅像の前に置く。それでいいよね？」

優「う、うん。」

諒「あのさ、私に提案があるんだけどいいかな。」

***** 200秒後

チームA）

可奈「さあ、てやりますかな！」

歩「誰から攻める？一応200秒たってから缶の配置場所を知らせる電話があつたけど、いろいろな場所に散らばってるね。」

恵美「とりあえず、姫野優奈さんが守ってる所が無難じゃない？あの子は何か運動出来る感じじゃないし。」

可「誰か見つかったても3人で行けば必ず勝てる！」

歩「私達はそうやって攻めていこう！」

***** チームB）

茜「私は走ると疲れるから走りたくありませんの！だから杏理さん

！美玲さん！あなたたちで倒してなさいませ！勝利は叶丸茜かのつまるあかねのもの

ですわ！オッホホホホホ！」

杏&美「かしこまりました、茜御嬢様。」

***** チームC）

蓮「勝負と言うからには絶対勝つわよ！星華！蘭華！愛華！」

星「もちろんだよ蓮華姉様！」

蘭「私達4姉妹が揃えば無敵だよね蓮姉！星姉！」

愛「ですけど油断は禁物ですよ御姉様方。」

蓮「そうだね。だからとりあえず、作戦としては最初は待機。相手の体力がなくなつたところを一気に攻め込む作戦でいこう。」

愛「分かりました。その作戦にしましょう。私たち華の4姉妹の力を見せてあげましょう。」

*****チームA」

可「缶発見！しかも誰もいない！ラッキー！」

歩「飛ばしすぎだよ…、私疲れた…。」

恵「私も…。」

可「しょうがないなあ、それじゃあ私が蹴ってくるね。」

歩&恵「いつてらっしやい。」

歩「案外楽勝だね！このまま残りも…、『それはどうでしょう？』

え…。」

恵「な、なんでここに…。」

*****チームB」

茜「あら、メールですわ。何ですって！？」

杏「どうなさいました？」

茜「歩さんと恵美さんがゲームオーバーになりましたわ…。」

美「え！？始まってまだそんなに経ってないですよ！一体誰が…。」

茜「まあそんなのどうでもいいですわ。とにかく捕まらないように杏理さんも美玲さんも気をつけなさい。」

*****チームC」

蓮「これは一筋縄ではいきそうにないわね。」

星「その二人はたまたまだよ、たまたま！」

蘭「だけど残りは9人だよ、このペースだとあつというまに…。」

愛「落ち着いてください。多分私の予想が正しければ相手の罠に引っかかったんだと思います。まだ予想なので誰がたてたのかは言い

ませんがこれからは特に気をつけていかないといけません。」
蓮「愛花の言うとおりにね。もう少し相手の動きを見てから私たちも動きましよう。」

***** 可「これだね、缶は。あれ中に何か入ってる。鍵だ、これが勝利条件の1ピースか。とりあえず、まず缶を。」

カコン！

可「よし！あれメール来てる。え…、二人が見つかってゲームオーバー！？一体何があつたのお…！？」

***** チームB

杏「こちら、杏理。目標を確認。桜の前には春野千春が一名。」

茜「やりましたわ！では杏理さんやつておしまい！」

杏「御意。」

そう言う杏理は電話を切り携帯をポケットに入れる。そしてスライトをめくり太ももから閃光手榴弾を取り出し千春の前に転がす。すると周りが光につつまれる。

杏「目があ！目があ！何かピカピカつてなった！」

千春は光を受けたダメージで地面に転がり回っていた。

杏「（悪く思わないでください。これも御嬢様の勝利のため。）」

杏理は缶まで残り3メートルをきっていた。すると杏理の前に四角い何かが転がってきた。

杏「これは閃光…、ピカッ！」

杏理は瞬時に体の向きを変え光をかわす。光がやみ向きをなおすと缶の前に千春ではない少女が立っていた。？「この缶を倒したかったら私を倒してからにしてね。」

杏「目的変更。目的鬼の殲滅。ターゲット…、」

***** チームC

蓮「さつき私に美玲からメールが来て杏理が缶を見つけたらしいわ。」

星「案外楽勝だね！これで残り2つだね！」

愛「早とちりはいけません、星華姉様。蓮華姉様、そのメールには缶を倒した。と言う文章がありますか？」

蓮「確認してみてもたけどなかったわ。あくまで発見した、としかないわ。」

蘭「アホだなあ、星姉。」

星「何だと！何がアホで貧乳の星姉だとお！」

蘭「そこまで言ってない！」

蓮「やめなさい、二人とも！」

そう言われた二人は静かに黙った。

蓮「今から蘭華に任務を与えます。今から杏理の所へ行き状況がわかり次第報告をしなさい。」

蘭「分かった！やつと動けるうゝ、嬉しい！」

そう言うのと蘭華は走っていった。

蓮「そして星華と愛華。今からあなたたちは協力して薫の缶を倒しに行きなさい。」

星「やったあ！」

愛「分かりました。蓮華姉様はどうされるのですか？」

蓮「私は一人で諒華の缶を蹴りに行くわ。」

星「それは駄目！柊さん頭いいし、何か罠があるかも！」

蓮「あるかもしれないから行くのよ。その方が面白いから。」

愛「分かりました、では蓮華姉様気をつけて。」 星「それが蓮華

姉様らしいって言うかなんていうか…、まあ気をつけて！」

そう言うのと3人はバラバラに散っていった。

第10話缶けり大会（前編）（後書き）

遅くなりましたがプロフィール第4段です。書ききれなかった人は次の後書きで発表します。

関野舞

身長159センチ

体重??キログラム

スリーサイズ

89/58/92

年齢25歳（独身）

髪色茶色

髪型さわ子先生

眼鏡をかけている

性格けいおん！のさわ子先生みたいな感じ。と言うより、さわ子先生。

姫野優奈

身長153センチ

体重39キログラム

スリーサイズ

79/50/84

年齢15歳

髪色紺色

性格

無口で人見知り。高校に入ってから直そうと努力中。

可奈／歩／恵美

明るくて仲良し馬鹿三人組。幼稚園の時からずっと一緒。三人がクラスバラバラになったことは一度もない。

叶丸茜

身長166センチ

体重48キログラム

スリーサイズ

93 / 60 / 92 /

髪色金色

髪型恋姫無双袁紹

性格

袁紹そのもの

私のスリーサイズ教えているのですから光栄に思いなさい！オッホッホッホッホッホッホッ！

ひはくあんり
拙魄杏理

身長168センチ

体重??キログラム

スリーサイズ

?? / ?? / ??

髪色ワインカラー

性格

不思議系。普段は無口。その他

茜のメイド兼ボディーガード。いろいろな事が出来る。（のちのちに出てきます）

たまづみれい
玉鉤美玲

身長166センチ

体重46キログラム

スリーサイズ

83 / 50 / 83

性格

御嬢様を抜いた袁紹。 結局お馬鹿さん。

その他

杏理と同じくメイド兼ボディーガード。 だけどドジばかりしている。 そのミスを自然と杏理が解決するため、美玲が怒られることはない。

第11話缶けり大会（後編）（前書き）

時間がかかってしまいすみません。そのかわり今回は少し長めです。
誤字脱字もあるかもしれませんが気軽に読んでください。

第11話缶けり大会（後編）

二人が捕まってから可奈は一人で座り込んで悩んでいた。

可「どうしよう…、1人になっちゃった…。」

？「か…なさん！」

可「あ、美玲ちゃん！どうしたの！？」

美「いやあ…、缶を探してるんだけどなかなか見つからなくてさあ…。」

可「だいたい場所は分かっているけど正確な場所は分からないからねえ…。」

美「そうだ！それじゃあ一緒に探そう！」

可「そうだね！！その方が見つかりやすいもんね！」

美「ここからなら薫さんの所が近いからそこに向かおう。」

可「了解！」

***** その頃、蘭華は杏理を探しにきていた。

蘭「あれえ…、桜の近くにいたって聞いたのにいないなあ…。」

周りをキョロキョロしていると先ほど皆と一緒に弁当を食べた場所に缶があることに気づいた。

蘭「ラッキー！これって棚からぼた餅！？」

缶を見つけると走り出す蘭華、その時。

ち「やっと目がなれてきたよ…。酷いめにあつた…。あ！蘭華発見！」

運悪く視力が復活した千春に見つかってしまった、缶を踏まれた。

蘭「嘘…！まさかここでおしまい！？そんなあ…。」

***** 蘭華が捕まったその頃、杏理はというと。

杏「はあー！」

？「はっ！」

未だに戦っていた。

？「ねえ私達何か忘れてない？」

杏「別に忘れてもいい事だったと思う。だから私達の戦いをしよう。」

？「それもそうね。それじゃ私の奥義見せてあげるわ！」

杏「私も。」

？&杏「くらえ！鳳○天駆！（ほう○てんく）」

ガキーン！

？「やるわね！」

杏「こんなに強い人と戦ったのは初めてです。」　　？「だけど勝つのは私だ！」

杏「負けませんよ、薫。」

二人には缶けりはもうどうでもよくなっていた。

*****　　蓮「銅像までまだまだ距離あるわねえ…。」

「薫と杏理が戦っていたところ、蓮華は諒華がいる銅像の所へ向かっていた。銅像があるところはちよつとした山の上の所にあるため行くのに苦労していた。」

蓮「よりにもよって、何でこんな所にあるのよ。しかも分かれ道になってるし。」

山を登っている最中分かれ道を見つけた蓮華は悩んでいた。

蓮「どっちの方が早く着けるかなあ？」

左の方は獣道になってるが近道できそうな道、右は安全だけど遠回り確定の道になっていた。

蓮「よし、左からいつて早く缶倒そう！」

そう言つと蓮華は左の道を歩き始めた。

*****　　～諒華～

諒「あのさ、私に提案があるんだけどいいかな…。」
ち「え？何々！？」

諒「1人1人バラバラにするよりかは、固まった方がいいと思うんだ。私の予想だけど多分最初に姫野さんか、ちーちゃんが狙われそうなんだ。理由としては、姫野さん中学の時は、運動系の部活には入ってなかったよね？」

優「うん。何で分かったの？」

諒「運動系に入ってたかどうかどうしても何らかのクセが出たり、傷やマメができたりするからね。姫野さんの手は白くて綺麗な手をしているから多分文化系だと思ったの。」

優「……………（照）」

ち「なるほど。それで私の理由は？」

諒「ちよつとした罨にひっかかりそうな顔にみえたから（笑）」

ち「ひど〜い！だけどあんまり否定できない。騙されやすい人だからなあ」（笑）」

諒「と言うわけだから薫には二人をサポートしてもらいたいんだ。」

いいかな？」

薫「任せて。だけど諒は何するの？」

諒「私は指揮官として上から指示出すよ。多分銅像の所には最後に向かってくるからさ。」

薫「わかった、その前にちよつといいかな？」

薫は諒華を二人から遠ざける。

諒「どうしたんだ、一体？」

薫「以前ペンダントを外すと元の姿に戻るのは覚えているよね？」

諒「ああ。戻るのにはよく持って1日でそれ以上は体が朽ちるんだったよな。」

薫「その通り。それでなんだけど、今日は3時間の間男に戻ってもらいたい。」

諒「え、どうして？」

薫「君の今の体は確かに女だ。だけど本来君は篠崎諒だ。そして篠崎諒は死んだ事になっていて本来の諒の体は死んでいるのを無理矢理このような形にして転生させているんだ、どうしても体に負荷が

かかってしまうだよ。だから1ヶ月に1回、わざと篠崎諒に戻らないといけないんだ。」

諒「そうか、じゃあ何で今なんだ？別に夜でもよくないか？」

薫「本来は夜がいいんだが、体のケアに必要な物が太陽の光なんだ。だから昼間にしかできないんだ。」

諒「なるほど。とにかく俺は1人になったら3時間は篠崎諒に戻らないといけないわけね。」

薫「そう言うこと。それじゃみんなの所に戻ろう。」

***** 諒「入学して間もないけどいろんな事があつたなあ……。」

諒は銅像の近くのベンチに座り過去を思い出していた。

諒「神様のミスとは言え死んだのに生き返るのがあり得なかったなあ、ましてや女の体になるとはマジで思わなかった……。」（中学の時のメンバー何してるかなあ……。皆と一緒にの学校行きたかったなあ……。そして父さんや母さん、姉さんは元気かなあ。）

過去を思い出し、しみりとしていた時。いきなり地震が発生した。諒「地震か！？けどあまり強くなかったな。」座っていたこともあり、大して被害は受けることはなかった。

地震が終わった数秒後

？「キャー！」

聞き覚えのある女性の悲鳴が聞こえてきた。

*****蓮華

蓮「ここは足場が悪いなあ……。だけどこっちの方が近いからなあ……。」

蓮華は今山道を歩いてる最中だった。その道は最初はそれなりに広がったが進むにつれて細くなり今いるところはギリギリ人が通れるぐらいの道の広さしかなかった。

蓮「だけど、こっちが近道だし、しょうがないか。」

諦めた蓮華は再び歩き始める。その時だった、突如地震が発生した。蓮「な、何！？地震！？」

足場が狭い場所にいる蓮華は落ちないように踏ん張る。だが、地震の影響で足場が崩れてしまった。

蓮「きゃー！」足場が崩れた蓮華は斜面から滑り落ちる。幸いにも10メートル落ちた所で木にぶつかり、途中で止まる事が出来た。

蓮「いたたたたっ、酷い目にあったわ…。それにしてもけっこう滑り落ちたわね、早く戻らないと…。」

そう思い立ち上がるうとするが右足に痛みを感じた。

蓮「痛っ！もしかしてひねった！？どうしよう、これじゃ登れない…、そうだ、携帯で助けを！」

助けを呼ぼうと思いポケットに手を入れるが携帯は入ってなかった。蓮「もしかして滑り落ちたときに、無くしたのかしら！これじゃ助けも呼べない…。」

絶体絶命だと思った蓮華は大声で助けを呼んだ。

だが、誰も気づかなかった。しかも、不運な事に雨が降り始めた。雨はやむことがないまま時間が過ぎていった。

蓮「さ、寒い…。こんなところにずっといるわけにはいかないわ…。こうなったら手だけの力で登るしかないわ。」

蓮華は手の力だけで10メートルの坂を登ろうとするが上手くいかずさっきの位置に戻ってしまった。何度も登ろうとするがやっぱり落ちてしまう。いつしか蓮華は泣いていた。

蓮「誰か助けてよ…。」

誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。聞こえるわけがないと分かっていたのに。だがその声に後ろから返事をする人がいた。

？「遅くなつてゴメン。今助けるから！」

蓮「え…？」

蓮華は後ろを振り向くと今まで出会ったことのない黒髪の少年がいた。少年は蓮華と同じ視線になるように座り込み

？「本当にゴメン…。君の声が悲鳴が聞こえたから急いで捜して…、

少年が言い終わる前に蓮華は男を抱きしめると再び泣きはじめた。
少年は泣き終わるまで抱きしめたままだった。蓮華が離れるころには30分たっていて雨もやんでいた。

蓮「ごめんなさい、いきなり抱きついてしまつて。しかも雨がやむまでなんて……」

？「あゝ、気にしないでいいよ。君みたいな美人な人にももらえるなんてラッキーだから。」

蓮「び、美人……」

美人と言われ蓮華は顔を赤くした。

？「さうで、とりあえずこの坂を登らないとな。」

蓮「待って！あなたは助けに来たつて言つたけどどうやって私を助けるつもりなの？」

？「その、君には少し恥ずかしい思いするかもだけど、いいかな？」

蓮「この際、恥なんてないわ。あなたに全て任すわ。」

？「分かつた、それじゃ……」

そう言う少年は蓮華をオンブすると人間とは思えないほどの跳躍力で約10メートルの坂を一瞬にして登りきつた。蓮華は驚きすぎて声が出なかった。

？「今から君の学校のバスまでゴメンけどオンブしていくから。」

蓮「い、いいわよ！そこまでしなくて！」

？「そうは言うが君は足を痛めてる。最悪ヒビが入つてるかもしれない。そんな君がこの山から降りられると思つてるの？」

蓮「そ、それは……」

？「君は1番上のお姉さんでしつかりしないといけないという意識を持つてると思う。それはいいことだけど時には誰かに甘えてもいいと思うよ。1人では出来ない事だつてあるんだから。」

蓮「待って！何で私が長女つて知つてるの……？」

少年は何も答えず、その質問に答えることはなかった。

しばらくすると蓮華たちが乗つていたバスが見えてきた。すると、

バスから何人かの生徒が降りてこっちに向かってきた。来たのは星華、蘭華、愛華、薫、千春だった。
星「蓮華姉様！大丈夫ですか！？」

蘭「うわぁ、泥だらけだよ！」

愛「足が腫れてます、遠足が終わり次第すぐに病院に行きましょう。」

薫「…。」

その時薫は何も言わず少年を見ていた。

ち「お兄さん蓮華を助けてくれてありがとう！」

？「当然の事をしただけです、それでは。」

そう言うつと蓮華を星華にオンブさせ、少年は再び山の方へ向かって行った。

蓮「結局彼の名前聞けなかった…。そう言えば缶けりはどうなったのかしら。」

愛「結論から言うつと私達の勝利です。薫さんの缶の所へ行った星華姉様と私でしたが誰もいないため簡単に倒しました。」

薫「あのバトルは楽しかったね！」

杏「またしよう。」

バトルを思い出したのか2人は握手をしはじめた。

星「まあ体力もかなり残っていたから、春野さんのも倒しちゃった。それで残りの柊さんだけど…、」

星華が言葉を濁らしているとききなり美玲と可奈が現れた。

美「それを私が華麗に倒したの！」

可「正確には、道に迷っていつの間にか山を登っていていつの間にか柊さんの缶の所に来ていたわけなんだけどね（汗）そう言えば柊さん見なかったね。そして今もないけどさあどうしたのかなあ？」
ち「え！？薫に続いて諒華も缶の近くにいなかったの！？何やってんの！？」

蓮「ねえ、アナタ達が諒華の缶を倒したのいつ？」

美「んーとね、地震が終わってちよつとしてからだね。」

美玲が言い終わると蓮華が震え始めた。

蓮「もしかして、あの地震に巻き込まれたの……？だって私も巻き込まれたのよ。諒華だって巻き込まれていてもおかしくない……。」

皆「！！」

ち「ヤバイよ！早く助けに行かないと！」

蘭「そうだよ！雨がやんでるとはいえ地面はぬかるんでるから危ないよ！」

皆が慌てていると蓮華がパチーン！と手を叩いた。すると皆は蓮華の方を見た。

蓮「落ち着いて！とにかく今は先生に状況報告をするべきでしょ！」

星「さすが姉様。冷静に対処してる。」

愛「それが1番だと思います。では私が先生に報告を……、ん？蓮「どうしたの？」

愛「あれは……、柊さんだと思います。」

愛華がいい、山の方を見ると諒華が歩いて来るのが見えた。諒華は皆が見えると走ってこっちに向かい土下座をしてきた。

よく見るとスカートなどは泥で汚れていた。

諒「本当にごめんなさい！山にいたとき降った雨で地面がぬかるんでいてその地面で足を滑らしてしまつて服を汚してしまつてさつきまで汚れを落としていたの！遅くなって本当にごめんなさい！」

ち「まあ無事でよかったよ！って言うか缶けり諒華いなかったから負けちゃったじゃん！」

諒「ゴ、ゴメンナサイ……。」

諒華が千春に謝っているとこっちへ先生が向かってきた。

関「みんなあー！そろそろ時間だから戻ってきてえー！って2人もどうしたの！？」

諒「こ、これは……。」

すると、関野先生は顔は笑ってるが目は笑ってない顔で

関「明日、この事に関わっている人は放課後全員職員室前に集合ね。」

と言ったものだから

皆「はいっ!!」

と元気よく答えた。次の日、缶けりに関わった全員、関野先生からかなり怒られた。その時の先生は鬼にも見えた。この時皆は思った。

（関野先生を怒らせてはダメだ。）

第11話缶けり大会（後編）（後書き）

蓮華に少年とのフラグをたたせました。その少年が誰なのかは分かつと思いますがあえてまだ書きません。

あとすみません、今週は忙しい為、プロフィールは書きません…。次こそは必ず！

感想・アドバイスお待ちしてます。批判などはやめてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524x/>

セカンドトランス

2011年12月5日22時49分発行